



Title	日本人妊婦の妊娠6か月と妊娠10か月のシルエット図の作成とシルエット図を用いた妊娠中の体格不満の検討
Author(s)	土屋, さやか
Citation	大阪大学, 2024, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/96252
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について <a>〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名 (土屋 さやか)

論文題名

日本人妊婦の妊娠6か月と妊娠10か月のシルエット図の作成と
シルエット図を用いた妊娠中の体格不満の検討

【研究の背景】

身体不満は「個人のもつ自分自身の身体に関する否定的な思考や感情」と定義されている。日本人女性の身体不満には、細い体格に対する理想と自身の体格認識の過大評価という体格に関する不満が特徴的にみられる。欧米の研究では、身体不満は過剰な妊娠中体重増加につながっていることが報告されているが、日本では、妊娠中の体格に関する身体不満により妊娠中体重増加量が制限されており、母子の健康に悪影響を与えている可能性が懸念されている。しかしながら、研究開始当初、日本で客観的データを用いて妊娠中の体格に関する不満を検討した研究はなかった。シルエット図は体格不満を客観的に測定するツールで、認識体格、理想体格とともに、認識体格と理想体格の差を体格不満として量的に測定する方法である。そこで、本研究では妊娠中の体格不満の客観的測定を行うために日本人妊婦のシルエット図を作成し（研究1）、作成したシルエット図を使用して日本人妊婦の体格不満について検討を行った（研究2）。

【研究1】

日本人妊婦の妊娠6か月と妊娠10か月のシルエット図を作成することを目的に、マタニティスイミングに通う妊娠6か月の女性16名、妊娠10か月の女性28名の協力を得て、水着での正面像の写真撮影を行った。撮影した写真データを用いて、身体22か所のリファレンスポイントの長さ計測し、回帰式を用いて、妊娠6か月、妊娠10か月のBody Mass Index（以下BMI）の18、20、22、24、26、28、30、32、34に対応するリファレンスポイントの長さを予測し、予測されたリファレンスポイントの長さを反映した9体のシルエットを作成し、妊娠6か月と妊娠10か月のシルエット図を完成させた。

【研究2】

日本人妊婦の妊娠中の体格不満を検討するために、コホート研究を行った。妊娠6か月のローリスク妊婦161名の研究参加を得て、妊娠6か月時と妊娠10か月時に研究1で作成したシルエット図を用いて体格不満の測定を行った。体格不満は、認識体格に相当するBMIから理想体格に相当するBMIを減じて算出した。また、妊娠6か月の体格不満の程度と体重増加量の関連について、重回帰分析で検討した。結果として、妊娠6か月には平均1.57BMI（標準偏差2.12）、妊娠10か月には平均2.53BMI（標準偏差3.37）に相当する体格不満がみられ、妊娠6か月から妊娠10か月には体格不満の大きさが増大していた。また、妊娠6か月時点で体格不満をもつ妊婦では、妊娠6か月時に体格不満を持たない妊婦と比較し、妊娠10か月の体格不満が大きくなった。しかし、研究仮説に反して、妊娠中の体格不満と妊娠中体重増加量は、妊婦の年齢と非妊時体格を統計的に調整すると有意な関連を認めなかった。

【総括】

本研究で作成したシルエット図により、日本人妊婦の体格不満を客観的に評価することが可能となった。日本人妊婦には痩せたい方向への体格不満がみられ、その体格不満は妊娠6か月から妊娠10か月にかけて増大した。また、妊娠6か月時にシルエット図を使用することにより、その後に体格不満を増大させる妊婦を見つけることができる可能性が示唆された。本研究で作成したシルエット図の利用により、妊婦の体格不満に対する心理的介入や適切な妊娠中の体重増加に関する助産師のケアを促進することができる可能性がある。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (土 屋 さ や か)			
	(職)		氏 名
論文審査担当者	主 査	教授	遠藤 誠之
	副 査	教授	渡邊 浩子
	副 査	教授	白石 三恵

論文審査の結果の要旨

【研究1】妊娠6か月と妊娠10か月のシルエット図の作成

日本人妊婦の妊娠6か月と妊娠10か月のシルエット図を作成することを目的に、マタニティスイミングに通う妊娠6か月の女性16名、妊娠10か月の女性28名の協力を得て、水着での正面像の写真撮影を行った。撮影した写真データを用いて、身体22か所のリファレンスポイントの長さ計測し、回帰式を用いて、妊娠6か月、妊娠10か月のBody Mass Index (以下BMI) の18、20、22、24、26、28、30、32、34に対応するリファレンスポイントの長さを予測し、予測されたリファレンスポイントの長さを反映した9体のシルエットを作成し、妊娠6か月と妊娠10か月のシルエット図を完成させた。本シルエット図により、日本人妊婦の体格不満を客観的に測定することが可能になると考えられる。

【研究2】シルエット図を用いた妊娠中の体格不満の検討

日本人妊婦の妊娠中の体格不満を検討するために、コホート研究を行った。妊娠6か月のローリスク妊婦161名の研究参加を得て、妊娠6か月時と妊娠10か月時に研究1で作成したシルエット図を用いて体格不満の測定を行った。体格不満は、認識体格に相当するBMIから理想体格に相当するBMIを減じて算出した。また、妊娠6か月の体格不満の程度と体重増加量の関連について、重回帰分析で検討した。結果として、妊娠6か月には平均1.57BMI (標準偏差2.12)、妊娠10か月には平均2.53BMI (標準偏差3.37) に相当する体格不満がみられ、妊娠6か月から妊娠10か月には体格不満の大きさが増大していた。また、妊娠6か月時点で体格不満をもつ妊婦では、妊娠6か月時に体格不満を持たない妊婦と比較し、妊娠10か月の体格不満が大きくなった。しかし、研究仮説に反して、妊娠中の体格不満と妊娠中体重増加量は、妊婦の年齢と非妊時体格を統計的に調整すると有意な関連を認めなかった。妊娠期に体格不満は増大するため、助産師のケアが必要であると考えられる。

本研究は、日本人妊婦の体格不満を客観的に評価する方法を開発した。測定方法を開発したことにより、日本人妊婦の体格不満を客観的に示したことが本研究の特徴である。妊娠中の体重管理に関して、妊婦の体格不満に対する心理的介入や適切な妊娠中の体重増加に関する助産師のケアの促進につながる重要な研究である。

以上のことから、提出された本論文は博士 (保健学) の学位を授与するに値するものと判断した。